慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	汲古儲蔵志索引
Sub Title	An index of an annotated bibliography of Shimizu Kyuko's collection
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2009
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.44 (2009.) ,p.211- 226
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20090000-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

汲古儲蔵志索引

大沼晴暉

例言

一、本書は故清水汲古氏が自らの蔵書について識した分類体の略解題「汲古儲蔵志」自筆稿本八巻のうち、頁数の関係で、前号に掲載できなかった索引部分を翻印したものである。

一、翻字はなるべく原本のおもかげをとどめることに努めたが、印刷上制約があり原本そのままの形はとっていない。

1、漢字は新旧別体を生かし、類似の字体で翻印した。

2、字詰・字配りや字の大きさは、印刷上の制約のため必ずしも原本どおりとはなっていない。

3、原撰者は書名の下に収録される巻数と丁数とを―で連いで記しているが、本翻印では論集第四十二輯（○は承前とある第四十三輯）の掲載頁数に改めた。

4、本翻印をお許し下さった清水汲古氏御遺族にあつく御礼申し上げる。

索引

あ

青標紙　○三三七
商人夜話草　○三四一
明鴉墨画廼栂襠　○三三六
芦分船　○二七四
吾妻紀行　○二七八
吾嬬路之記　○二七八
有馬湯山記　○二七五
有馬山温泉小鑑　○二七五
有馬六景　○二九七

い

いさよいの日記　○三一一
いなご　○三三一
一休和尚法語　三六〇（○三四〇）
一休はなし　三六七
一休関東咄　三六八
一休諸国物語　三六八
一之富當眼草稿　○三三六
伊曽保物語　三七一
伊勢物語　○三〇七
伊香保志　○二八五
爲愚痴物語　三五七
爲人鈔　三五九
異本日本絵類考　○三四六
諫草　三五九
狗張子　三七〇
犬百人一首　○三三一
當世下手談義　○三三二

う

うすゆき物語　三六六
宇治拾遺物語　○三〇九
浮世物語　四〇〇

浮世続絵尽　四一九
絵本名物浪花のながめ　二九七
艶道通鑑　四一四

え

江戸職人哥合　四一八
江戸砂子温故名蹟志　二八〇
江戸繁昌記　二八三
江戸名所花暦　二八三
江戸遊覧花暦　二八二
江戸名所図会　三〇〇
江戸切絵図　三〇三
江戸風景　三〇五
江戸時代の書目　三二六
江戸名所百人一首　三三二
江戸当時諸家人名録　三四三
江戸時代初期絵入本百種　三二九
江都二色　四二〇
絵師草紙　四一八
絵入淨瑠璃史　三三〇
絵本江戸土産　三〇一

お

おあんおきく物語　三三七
おさな源氏　三七三
をんな仁義物語　三六二
お俊傳兵衛十七年忌　四二一
大坂物語　三九三
女郎花物語　三六三
女諸礼集　三七九
女重宝記　三八一
往生要集　三〇七
伽婢子　三七五
落穂集　三三七
落穂集追加　三三七
御曽子しま渡　三一六
温故年中行事　四二一
温泉游草　二七五

音曲玉渊集　三四四
か
可笑記　三五五
可笑記評判　三五六
下学集　三二三
仮名列女傳　三六一
仮名世説　三三八
仮名草子　三三九
華夷通商考　二七〇
嘉永武鑑　三二六
家蔵松会板之書目　三二六
甲子吟行　三三二
改正人国記　二六七
懐宝道中図鑑　二九三
開元天宝遺事　三二四
鑑草　三五七
鎌倉諸藝袖日記　四一六
鴨長明海道記　二七七
河内名所図会　二九八
方言修行金草鞋　三三五
軽口大矢数　三三四
紙漉重宝記　三四二
新編鎌倉志　二八〇
活版経籍考　三四二
堪忍記　三六四
堪忍袋　三四〇
勧学院物語　三六五
簡礼集　三七八
款識彙例　三二六
環斎紀聞　三三七
観音和談抄　三四〇
還魂紙料　三三九
き
祇園(ママ)物語　三五三
吉利支丹退治物語　三八六
鬼利至端破却論傳　三八七

木曽路之記　二八六
岐蘇路安見絵図　三〇六
義経記　三一二
稀書解説　三二〇
崎陽志　三三七
清水物語　三五二
清水の御本地　三一五
九想詩絵抄　四一八
休息句合　三三一
狂哥咄　三六九
狂哥旅枕　三三一
狂言記　三一八
狂言記拾遺　三二〇
京の水　二七三
京羽二重大全　二七三
教訓差出口　三三二
享保よみ賣はやり唄　三三六
杏雨印譜　三四六
妣男なさけの遊女　四二〇
近代名家著述目録　三二六
近世奇跡考　三三九
金壁故事　三二四
金々先生栄花夢　三三五
伊達家本金句集　三二七
襟帯集　三四二
く
車僧草子　三一一
け
京城勝覧　二七二
傾城評判記　三三四
経籍訪古志初稿本　三四二
慶長以来書賈集覧　三三〇
慶長見聞集　三四三
源氏小鏡　三二〇
同　三二二
玄同放言　三三八

玄抄類摘　○三四一
諺草　○三二三

こ

こあつもり　○三一五
こをとこのさうし　○三一五
こわたきつね　○三一六
小口合　四二一
小町物語　○三一八
古今役者物語　四二〇
五雑組　○三二四
骨董集　○三三九
好色一代男　四〇六
好色一代女　四〇八
好色五人女　四〇八
好書雑載　○三四四
晃山勝概　○二八五
廣益書籍目録　○三二五
国花万葉記　○二六六
言葉よせ　○三二三

さ

さる源氏草紙　○三一七
狭衣　○三〇八
西行物語　○三〇九
西行物語絵巻　○三〇九
西鶴諸国はなし　四〇七
西鶴本　○三二九
再校江戸砂子温故名蹟志　○二八〇
采覧異言　○三三八
西遊日簿　○二八九
三芝居役者絵本　四二〇
讃嘲記時之太鞍　四〇三

し

しだれ柳　四二〇
しゆてん童子　○三一七
四しやうの哥合　四一九

死霊解脱物語聞書　三八九
紙魚の昔かたり　三四六
地錦抄　三四三
信貴山縁起絵巻　三一一
鹿の巻筆　三三四
繁野話　三三二
島原記　三九四
釋伽の本地　三一三
朱雀遠目鏡　四〇四
朱雀信夫摺　四〇五
拾遺都名所図会　二九四
拾遺東京名勝画詞　三〇六
聚楽物語　三九一
書林清話　三四五
諸国因果物語　四一二
諸州巡覧記　二六六
商人夜話草　三四一
十二たんさうし　三一四
女訓抄　三六一
正直咄大鑑　三三四
祥刑要覧　三四一
諸国巡覧懐宝道中図鑑　二九三
家蔵松会板の書目　三二六
信長記　三八九
人倫訓蒙図彙　四一九
壬戌羈旅漫録　二七八
新うすゆき物語　四一三
新編鎌倉志　二八〇
新編武蔵風土記稿　二八二
新鑑草　三四〇
新撰紙鑑　三四二
新撰洋学年表　三二八
新説百物語　三三三
す
還魂紙料　三三九
住吉物語　三一〇

せ
世間胸算用　四一二
聖賢像賛　四一七
成簀堂善本書目　三二七
摂州有馬山勝景図　二九六
撰集抄　三〇八
剪燈新話句解　三四三
箋注和名類聚抄　三二四
善光寺本地　三一三

そ
曽我物語　三一二
増益書籍目録　三二五
藏書印譜　三四五
続藏書印譜　三四五
増補華夷通商考　二七〇
続江戸砂子　二八一
続東京名勝画詞　三〇五
続狂言記　三一九
続膝栗毛　三三三
従夫以来記　三三五

た
たかたち　三一四
たまかつら　三一九
他我身の上　三五六
大佛物語　三五三
内裏雛　二七一
竹とり物語　三〇七
沢庵和尚鎌倉記　三九七
糺物語　三五四
伊達家本金句集　三二七
髙尾年代記　三三九
丹後国天橋図　二九五

ち
千代の友鶴　四一九
竹斎　三九五

塵塚物語　三四四
著作堂一夕話　三三八
町人嚢　三三九
町人嚢底拂　三四〇
朝鮮征伐記　三九二
聴訟彙案　三四一

つ

つくば山恋明書并名所　四一七
つれつれ草　三〇九
通念集　二九〇
月次のあそび　四二〇

て

貞徳狂哥集　三三一
鉄槌増補　三七七

と

渡世身持談義　四一六
東海道名所記　二七七
東海道駅路の鈴　二九九
東海道名所図会　二九九
東海道五十三次続絵狂哥入　二九三
東海木曽両道中懐宝図鑑　三〇五
東京名勝画詞　二八四
東都歳時記　二六七
東遊記・西遊記　二六九
同　三四一
棠陰比事　三七二
棠陰比事物語

な

な、くさ草紙　三一六
長崎むじん物語　三八四
長崎虫眼鏡　三九九
長崎夜話草　二八八
長崎聞見録　二八九
長崎行役日記　二八九

長崎土産　四〇五
同　日本永代藏　四一〇
長哥こきんしう　烹雜の記　二九〇　三三八
難波鑑　修紫田舍源氏錦絵　三三六　四一八
浪花講定宿図会　三九九
七十一番哥合　二九三　ぬ
男重宝記　四一八　塗籠本伊勢物語　三〇七
男女諸礼宝鑑　三八二
南畝莠言　三八〇　ね
南都名所道筋記　三三八　ねこ胤大友のまとり　三三四
難波物語　二七六　ねごと草　三六五
四〇二　ね物かたり　四〇二

に　の

日光名勝記　二八五　野澤名物焼蛤　四一五
日本歳時記　二七〇　野槌　三七六
日本釋名　三二三
日本書籍目録　三二五　は
日本山海名産図会　二九二　はちかつき　三一五
日本山海名物図会　二九一　はらだ　三一五

梅園日記　三四〇
咄の絵有多　三三三
浜出草紙　三一七
早引浪花講定宿図会　二九三
張替行燈　四一八

ひ

菱川月次のあそひ　四二〇
百八町記　三五四
百人女郎品定　四一八
兵庫名所記　二七六
貧人太平記　四一一

ふ

ぶんぶくちやかま　三三五
武道傳来記　四一〇
武左衛門口傳咄　三三四
武江年表　三二七
風流謡年代記　三四二
分間江戸絵図　三〇二
文房四譜　三四五

へ

平家　三一〇
平洲先生小語　三四二
辨慶物語　三一六
辨疑書目録　三二五

ほ

ほんてん國　三一七
補遺東京名勝画詞　三〇六
北斎道中画譜　四一九
北里歌　四二〇
北里十二時　四一八
北州異素六帖　三三三
北國一覧写　四二〇
北窓瑣談　三三八
北越雪譜　二八七

墨水遊覧誌　二八二
墨場必携　三二八
ト養狂哥集　四一九
ト養狂謌　四一九
保元平治物語　三一一
本朝女鑑　三六三
本朝二十不孝　四〇九
本朝藤陰比事　四一三

ま

真澄遊覧記　二八七
万葉用字格　三四一

み

身延のみちの記　二七九
身延鑑　二七九
身延山図経　二七九
三升増鱗祖　二三五
美作略史　二三七

都名所図会　二九三
都名所三十景　二九五

む

武蔵あふみ　三八八
武者物語　三九五
夢遊集　三六〇
方言修行金草鞋　三三五
新編武蔵風土記稿　二八二
室町殿物語　三二〇

め

名山勝概図　四一八
名物浪花のなかめ　二九七

も

蒙求標題俚諺鈔　三二五
尤の雙紙　三八四
元のもくあみ物語　三九八

や

野山名霊集　二九一
和州巡覧記（やまとめぐり）　二七六
薬師通夜物語　三八五

ゆ

ゆかた合　四二〇
由来明鑑集　三七八
友禅ひいな形　四一九
酉陽雑俎　三二四
夢物語　三三七

よ

よこ笛草紙　三一七
餘景作り庭の図　四一九
雍州府志　二七一
擁書漫筆　二三八
用捨箱　二三九
養生訓　三三八
吉原こまさらい　四〇二
吉原恋の道引　四〇四
吉原十二時　四一八
吉原十二時狂哥合集　四一八
吉原遊君すかた見　四一七
吉原はやり小哥総まくり　三三六
吉野山獨案内　二七七
淀川両岸一覧　二九八

り

理非鑑　三五八
理斎隨筆　三四〇
略可法　三四二
劉向列女傳　三四一
料理物語　三八三
両道中懐宝図鑑　二九三

る

類校注釈金壁故事　二三四

れ

歴世女装考　二三九

わ

和国諸職絵つくし　四一七
和州吉野山勝景図　二九六
和州巡覧記　二七六
箋注和名類聚抄　三二四

（了）

解　題

汲古儲藏志八巻附索引　清水汲古　昭和五八年六月序（自筆・ペン書）大八冊

海松色表紙（二五・九×一八・四糎）単辺題簽に「汲古儲藏志　巻一（一―三）」、橙色表紙同「汲古儲藏志　巻四（五）」、濃茶色表紙同「汲古儲藏志　巻六（一―八）」と識さる。

扉、後に述べる罫紙中央に「汲古儲藏志　巻一（一―三）（隔一行）假名草子　上（中・下）」、「汲古儲藏志　巻四（隔一行）浮世草子／繪　本」、「汲古儲藏志　巻五（隔一行）地誌・紀行」、「汲古儲藏志　巻六（隔一行）名所圖會・繪圖」、「汲古儲藏志　巻七（隔一行）古物語・室町物語／辞　書・書　目」、「汲古儲藏志　巻八（隔一行）狂　歌・誹　諧／讀本・滑稽本・洒落本／咄　本・草　雙　紙／隨　筆　等／索　引」。

凡例一丁を冠せ、畧称表、通四丁（表第三行まで）、三行を隔て総目、通四丁。

内題なく、二行取りで「一、假名草子」と小題、次行に赤色のボールペンで（教義、教訓）と分類を示し、「清水物語」と題し解説を識す。

本文は、裏丁に「コクヨ　ケイ―10」と横書された双辺（二〇・三五×一三・九五糎）有界一三行の藍刷印刷罫紙使用。罫紙は紙質の違いから購入時期を異にする二種のものを使用したかと思われる。第一冊二七丁、以下全て通丁にて第二冊五八、第三冊八五、第四冊一一〇、第五冊一四九（表まで）、第六冊一七五（表まで）、第七冊二一二（表まで）、第八冊二三九、以下索引、通二四八丁。第五―七の裏丁未記載の冊を除き全冊巻末に遊紙一丁綴じらる。青色インクの万年筆で記され、ま標記、貼紙、訂正、挿入紙などあり。挿入紙にはボールペン書を含む。各書名は二行を隔てて識されるを原則とするも、絵本・地誌・古物語・室町物語（一九五丁より二行空き）・辞書・書目・狂歌・誹諧以下、又分類項目の朱書の部分もまま一行空きの箇所がある。本文を一格下げて記すため、第二冊の三一―三四、三六―三八、四一―四四丁まで押界で横線、四六以下は鉛筆で横線を引き見当とす。四六―一〇三、二〇四―二一二、二三四裏―二三九表。

因みに扉に複数の小題を記せるものの始まりの丁数を示せば、繪本一〇四、辞書・書目二〇〇、讀本・滑稽本・洒落本二一五、

咄本・草雙紙（赤本・黄表紙・合巻）二一八、隨筆等二二三。

索引は中央に複線を引き、上下二段に分たる。あ―わまで各項一行を隔てて書名を載せ、横線を引きて所収される巻と丁とをハイフンで繋いで表形式に記載さる。これは本翻印では翻字掲載号の該当する頁に改めた。

なおやや古色を帯びた罫紙に識されるのは絵本一〇四―一一〇、地誌・紀行一一一―一四九、名所図会・絵図一五〇―一六〇、古物語・室町物語一七六―一九五、辞書・書目二〇〇―二〇三、狂歌・誹諧二一三―二三四丁である。

この手書の解題は、第一―三、四―六、七・八の夫々が折畳紙に入れられ保存されている。

撰者の清水汲古氏については御遺族の意向もあり、極単簡に識すにとどめる。明治卅六年東京の生れ。東京商科大学卒業後、会社に勤務。為事の関係から南米を視察、また台湾に駐在した時期もあったと云う。いつも古書店から送られてくる目録を机に拡げ、丹念に見ていたとのこと。毎土曜の午後には神田神保町の古書街に出掛ていたらしい。本目録に記載の所謂る工具書を参考に、実地に書物を較べて見るという作業を行っていた様子が本書の記載から如実に窺われる。キリスト教史学会の会員で、上智大学の人たちと親しく、そうした関係からか天理図書館の機関誌ビブリアが毎号送られてきていたとのこと。また大漢和辞典の校正をしていたという話もある。

翻印で新旧別体の漢字を成可く生かしたのも実はそうした昭和五十年代の一人の云わば漢字生活が面白かったからで他意はない。ただこの新旧別体の文字は必ずしも撰述対象である原典通りとはなっていない。自らの文字遣いで書換えられている。そのことだけはお断りしておきたい。

本書は先にも触れた如く、本は比べて始めて分るものだという基本的な考えに忠実で、そのことが快く潔い。ただ用語については当時としては無理からぬことながら、読む者は刊と印との使い分けに留意してほしい。また原典と複製とが同規準で並べられているところに異和感を持つ読者もおられるかと思う。

一人の古書愛好家が自ら購入し蒐集した書物を参考書・工具書を用い、自らの眼と手で類別し解題を書く。この翻印がその一の紙碑ともなれば幸である。